

学校教育学専攻 教育発達支援系 特別支援問題群

選択科目 共通問題

問題1 次の問いに答えなさい。(100点)

以下は、国連障害者権利委員会から日本政府への勧告(2022年9月9日)の日本語仮訳の抜粋です。「医学モデル」と「機能障害」について説明した上で、日本で「障害認定及び手帳制度を含めた障害の医学モデルの要素を排除」した場合の利点と欠点について、あなたの考えを述べなさい。

8. 委員会は、締約国に対して以下を勧告する。

(b) 障害認定及び手帳制度を含め、障害の医学モデルの要素を排除するとともに、全ての障害者が、機能障害にかかわらず、社会における平等な機会及び社会に完全に包容され、参加するために必要となる支援を地域社会で享受できることを確保するため、法規制を見直すこと。

出典：出典：国連障害者権利委員会「日本の第1回政府報告に関する総括所見」(仮訳)
外務省ホームページより

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jinken/index_shogaisha.html

【出題意図】

「医学モデル」と「機能障害」の理念紹介に終わらせず、資源配分・認定指標・合意形成・救済手続・特別支援教育制度等の運用課題を理解しているかに関して、本設問を通じて確認する。論旨の一貫性と自説の論理性も評価する。

機能障害等について知識が不足しており説明できない場合においても、論旨が整っているか、自らの考えを説明できるかといった修士論文のための書く力を見極める。

【解答例】

解答例は公表しない

学校教育学専攻 教育発達支援系 特別支援問題群

選択科目 共通問題

問題2 次の英文を和訳しなさい。(60点)

著作権保護の観点から、公表していません

出典 : Schiltz, K., L., Schonfeld, A., M., & Niendam, T. A. (2012) Beyond the label – A guide to unlocking a child’s educational potential. pp.129-130.

【出題意図】

修士論文の作成ならびに修士課程での授業等において必要となる、英語で書かれた論文の内容を理解するための英文読解力をみる。

【解答例】

解答例は公表しない

学校教育学専攻 教育発達支援系 特別支援問題群

選択科目 選択問題

問題1 次の用語群から4問を選択して意味を説明しなさい。なお、選択した語句の番号を、各解答欄内左上部の()に必ず記入すること。解答の順序は問わない。(40点)

【出題意図】

特別支援教育の分野における研究のために必要とされる基本的な語句の意味を理解し、かつ簡潔に説明する力量の有無を評価するために出題した。特別支援教育の分野における研究に必要とされる専門用語の意味を理解し、それを簡潔に説明できる力量の有無を評価するために出題した。

【解答例】

(1) 情動調整

情動とは、主観的経験・生理的反応・表情や行動といった表出的側面が絡みながら、特定の行為へと駆り立てる反応を意味する。これらの情動を適切に調整する力が「情動調整」であり、感情をそのまま出すのではなく、社会的に望ましい行動へと結びつける自己制御の力としても位置づく。OECDは非認知的スキルの要素として情動調整を位置づけており、教育や社会的成功に不可欠な能力としている。これらのスキルは就学前の早期から育むべきものである一方、ASD児をはじめとする発達障害児は、情動の気づき・制御・表現が苦手で、調整困難が行動問題や二次障害を引き起こすことが多い。そのため、個別支援や予測可能な環境調整などが欠かせない。

(2) 偏差知能指数

偏差知能指数(DIQ)とは、同年齢集団内での知能の相対的な位置を示す指標で、得点を平均100・標準偏差15のスケールで標準化し、個人の知的発達を明確に位置づけるものである。代表的な知能検査であるWISC(ウェクスラー式知能検査)では、この偏差IQを用いて全体的な知能水準を測定し、特定の認知領域における得意・不得意も把握する。近年改訂された田中ビネー知能検査第VI版でも、2歳から13歳11か月の子どもを対象に、従来の精神年齢を活用しつつ、主要な指標として偏差IQが導入された。これにより、加齢に伴い数値の変動幅が大きくなりやすかった比率IQの課題が解消され、客観的かつ信頼性の高い知能評価が可能となっている。

(3) 強化スケジュール

強化スケジュールは、行動に対して褒めたり報酬を提示したりするなど、強化子を与えるタイミングや頻度の体系を指す。行動形成においては、まずは連続強化によって行動を確実に定着させ、学習が進んだ段階で間欠強化に移行し、自然な発現を促す。間欠強化には、固定比率・変動比率などの種類があり、対象に応じて使用したり、実験的な研究では各条件での結果の差異を検討する。障害児教育の領域では、例えば自閉スペクトラム症のある子どもは予測可能な刺激に安心感を持つため、支援の初期段階では固定スケジュールを用い、慣れてきた段階で変動スケジュールを取り入れることで、適応行動の維持・一般化を促す。このように、支援の一助となる概念である。

学校教育学専攻 教育発達支援系 特別支援問題群

選択科目 選択問題

(4) ADD (Attention Deficit Disorder)

ADD (注意欠如障害) は、ADHD (注意欠如・多動症) の「不注意優勢型」として分類されており、多動性や衝動性をあまり示さず、主に集中困難や忘れ物の多さ、順序立ての苦手さなどを特徴とする。DSM-5 では ADHD の下位分類として扱われている。実行機能の弱さや情報処理のスピードの遅さが背景にある可能性が指摘されている。衝動性が目立ちやすい ADHD のタイプと比べて、ADD は外見上目立ちにくい臨床・行動像を示すため、周囲の気づきと支援が遅れやすいともいえる。環境調整や視覚支援、タスクの構造化など、注意記憶に関わる認知領域への配慮を中心に、個別の特性に応じた支援が重要である。

(5) アダプテッド・スポーツ

アダプテッド・スポーツとは、年齢、性別、障害の有無、体力や心身の状態など、個々の多様なニーズに応じてルールや用具を工夫し、誰もが無理なく楽しめるように調整されたスポーツである。「スポーツに人を合わせる」のではなく、「人にスポーツを合わせる」という発想に基づいている点が特徴である。幼児や高齢者、障害のある人、体力に自信のない人など、配慮を要するすべての人が対象となる。類似の言葉に「パラスポーツ」があるが、これは障害者を対象としたスポーツであり、アダプテッド・スポーツはパラスポーツを含むより広い概念である。生涯にわたり誰もが安全かつ楽しく取り組めることを目指すのが、アダプテッド・スポーツの本質である。

(6) 2E 教育

2E (Twice Exceptional) 教育とは、ギフテッドと発達障害の両方の特性をもつ子どもに対し、障害の補償と才能の伸長という二重に特別な支援を行う教育である。発達障害のある子どもは認知能力に偏りがあり、苦手な領域と得意な領域が混在しやすい。2E 教育は、苦手を補いつつ得意を伸ばすことで、その子の可能性を最大限に引き出すことを目指す。これは、欠点の克服を重視する「欠陥モデル」から、強みに注目する「成長モデル」への転換でもある。バームは 2E の子どもを、才能が目立ち障害が見えにくいタイプ、両方が目立たないタイプ、障害が目立ち才能が隠れるタイプの 3 つに分類している。2E 教育の本質は、多様な特性を理解し、個々の強みに応じた柔軟な支援を行うことにある。

(7) 特別支援学校のセンター的機能

特別支援学校のセンター的機能とは、地域における特別支援教育の中核として、小・中学校等に専門的な支援を提供する役割を指す。2007 年の学校教育法改正により、この機能は制度的に位置付けられた。具体的には、①小・中学校等の教員への支援、②特別支援教育に関する相談や情報提供、③障害のある幼児児童生徒への指導・支援、④福祉・医療・労働など関係機関との連絡・調整、⑤小・中学校等の教員に対する研修協力、⑥障害のある幼児児童生徒への施設・設備の提供、などが挙げられる。これらの機能を通じて特別支援学校の専門性が発揮され、地域全体の特別支援教育の質の向上や、特別な支援を必要とする子どものニーズに応じた適切な教育の実現が図られている。

学校教育学専攻 教育発達支援系 特別支援問題群

選択科目 選択問題

(8) 吃音

吃音は発話の流暢性障害の一つで、話し言葉のリズムや流れが阻害される状態を指す。繰り返し（ぼぼぼく）、引き伸ばし（ぼーーく）、ブロック（・・・ぼく）といった吃音中核症状が特徴的に認められる。これらの症状は本人の意図に反して生じ、円滑なコミュニケーションを困難にする。また、吃音は発話症状だけでなく、話すことへの不安や恐怖、対人場面での回避行動など、心理的・社会的な問題を伴うことがある。さらに、学校ではからかいやいじめが問題となることもあり、家庭でも適切な対応方法がわからず悩むケースも少なくない。そのため、ことばの教室や医療機関では、流暢性の改善だけではなく、心理的支援や環境調整を含めた多面的・包括的アプローチが重視されている。